

1276-25

哲學館主井上圓了述

漢字不可廢論

一名國字改良論駁擊

漢學專科講義錄

毎月四號合本二冊、一日及十六日を以て發行全三年半にて左の諸科を掲載す

本講義録は自宅にて和漢科を獨修せんと欲する者或は文部省教員檢定試験の漢文科及倫理科に應せんと欲する者の爲に發行す

●講義

毛詩 (根本通明博士 八家文) 周禮 (周平裕講師) 論語 (山井小幹講師) 孟子 (山井小幹講師) 列子 (山井小幹講師) 左傳 (山井小幹講師) 史記 (山井小幹講師) 漢書 (山井小幹講師) 周易 (山井小幹講師) 春秋 (山井小幹講師) 楚辭 (山井小幹講師) 莊子 (山井小幹講師) 荀子 (山井小幹講師) 韓非子 (山井小幹講師) 支那文學史 (山井小幹講師) 支那語等 (山井小幹講師)

●祝詞

勝南先生伯黃石翁 加藤博士 西村先生 重野博士 島田博士 三島先生 岡本大人 井上館主 依田先生 坂田先生 井上博士 星野博士

右發行所

東京小石川原町 字駒込鷄聲夕窪

哲學館

序言

本書は過般井上館主が本館漢文科生徒に對し二三回を重ねて演述せられし漢字不可廢論を編輯したるものなり今や國字改良論大に其氣焰を高め天下の學生皆之に雷同唱和せんとするに方り漢字の廢すべからざる所以を擧げて之に示すは亦今日の急務なるを知り此に本書を印刷して廣く有志の者に頒つ

明治三十三年二月

哲學館編輯部

漢字不可廢論目次

- Q一 余が漢字不可廢論を主唱する理由を述べ 一頁
- Q二 漢字は世界中最大困難の文字なりといふを駁す 四頁
- Q三 漢字は腦髓の發育に妨害ありといふを駁す 七頁
- Q四 漢字は老朽せる文字なりといふを駁す 十頁
- Q五 漢字は字數夥多、字畫繁雜なりといふを駁す 十二頁
- Q六 漢字は發音に困難なりといふを駁す 十四頁
- Q七 漢字は西洋語を譯するに不便なりといふを駁す 十七頁
- Q八 漢字は言文一致を實行する妨になるといふを駁す 二十頁
- Q九 漢字は活字を組立つるに不便なりといふを駁す 二十二頁
- Q十 漢字を廢すれば有らゆる困難を避くべしといふを駁す 二十五頁

(十一) 漢字を廢すれば人心上は大異動を起す所以を述べ

二十七頁

(十二) 漢字を廢すれば倫理上に大影響ある所以を述べ

三十頁

(十三) 漢字には種々の長所あることを述べ

三十四頁

(十四) 漢字には美術的興味あることを述べ

三十八頁

(十五) 漢字を用ふれば日本の特性を保存する益あることを論ず

四十頁

(十六) 漢字を用ふれば東亞の勢力を占むるの益あることを論ず

四十四頁

(十七) 漢字と教育との關係を論ず

四十八頁

(十八) 漢字と宗教との關係を論ず

五十一頁

(十九) 日本國は漢學國、日本國民は漢學國民なることを論ず

五十五頁

(二十) 明治の維新は漢學の活用なることを論ず

五十九頁

(廿一) 漢字教授の方法を論ず

六十四頁

(廿二) 國語改良の方針を論ず

六十七頁

(廿三) 以上の所論を結ぶ

七十一頁

漢字不可廢論目次終

漢字不可廢論

一名國字改良論駁撃

井上 圓了 演述

(一) 余が漢字不可廢論を主唱する理由
を述ぶ

亞細亞の東端に在りて高く獨立を聳^{ソビヤカ}し居る我大日本帝國は、元來漢字國である、然るに其漢字國であるにも拘らず、近來國字改良を唱ふるものアチラ、コチラに起り、志きりに漢字を全廢せんことを唱へ、其氣焰^{キエン}一日より高まりたれば、世の輕躁浮薄連中は、深く其利害得失を考へずして、みだりに之に雷同せんとする様に見ゆるが、是は誠に嘆息の至りであります、若かし生意氣連中の雷同だけならば、左まで氣に留めるに

及ばぬも、此頃になりては堂々たる帝國教育會が之に賛同する様になりました、されは兎ても黙して居ることは出来ぬ、苟も日本國民たる以上は、飽まで其論の可否得失をたゞして、天下後世に示し、國家百年の長計を誤らざる様に致さなければなりません。

余が聞く所によれば、漢字廢止論を主唱せし人々の中には、漢字漢文をロク／＼讀むことが出来ずして、矛盾をホコトシと讀み、枚舉をボクキヨと讀む様な連中が多い、其外に西洋人の下せる批評を御無理御尤と、一から十まで眞受にする洋人崇拜連と、從來學問上にて漢學を排斥し漢學者を敵視する風ある一派の國學者連とが加はりて居るさうだが、ツマリ先年の羅馬字會、或ひは假名の會の殘黨が、氣候につれて再び芽を吹き出したもの、と考へて差支ない、彼等が先年の失敗に懲りずして復また漢字を全廢すべしなど、言ひ觸らすは、ナント笑止千萬ではないか、其れは兎もあれ、世間の雷同連中には、是等の失敗屋の尻馬に乗りて、駆け出すものがあるとは、言斷道斷の次第であります、さは申すもの、帝國教育會が之に賛成したるは、何にか別に深き意味あることでありませう、辻會長閣下を始めとし、其會員の中には、我邦の賢明なる歴々の先生方が澤山ましますことなれば、マサカ尻馬連中の類ではありませんまい、定めて立派なる御議論あること、信すれども、先日友人の宅で、教育會より貴衆兩院へ提出せられたる國字改良請願書とやらを拜見するに、一言半句として感服する所なきには、少々二度ビツクリの方であります、余は不肖ながら斯る意見には、如何に同意したくも、賛成することは出来ぬ、否、大反對であります、既に大反對である以上は、本志を枉げて、其會の牛後となるは、自ら辱しとせざることなれば、此際斷然脱會するに如かずと心得、兩三日前に脱會届を差出しました、いよく脱

會の上は、教育會連中からは悪魔の如く忌み嫌はるゝであらうけれども、口を極めて其不道理なる點を攻撃せなくてはなりません。是れが余の漢字不可廢論を主張する理由であります。

四

(二)漢字は世界中最大困難の文字なり

といふを駁す

帝國教育會の請願書を読み、又は國字改良論者の意見を聞くに、何れも漢字は世界中最大困難の文字なりと申すか、これは餘り仰山ギョウサンすぎる吹聴フイキョウである。懸直ケンチキ半分と見積りても、猶ほ高タカすぎる様に考へます。全地球上果して漢字ほど六ヶ敷ムツカシ文字はないか、サウいふ常人は果して古今万国の文字を究め盡して居るか、これは一大疑問である。而して此説の起りたる本は、西洋人の下せる批評を眞受マコケにしたるに相違ない、即ち教育會の請願書中に、歐人某の言に、日本の言文は實に全世界に於て最も困難なる

ものなりと、又は米人某の言に、日本の學生は語學に於て實に世界無比の重荷を負ふものなりとあるを引き、其證據とせられたるを見受ました。他の論者の言ふところも、矢張右同斷である。是れ實に奇怪千萬と云はなければなりません。ツマリ佛教家が釋迦の言を根據とし、耶蘇敎家が基督の言を證據とするが如く、此引證は洋人崇拜敎を信する徒の論法と見做すより外はない。今之を譬へて申さば、西洋人は日本人の箸シヤウを握り下駄ニギを着くを見て、これは最大困難なりと評するとのことなるが、其言を證據として、日本人にも最大困難なりと論するに異りませぬ。すべて困難とか平易とか申すは、多くは習慣の有無に關係したことである。西洋人には箸を握る習慣がないから、困難なるに相違なきも、日本人には其習慣があるから、却て平易に出来る。之と同じく漢字は西洋人には其習慣がないから、非常に困難のやうに感すべきも、我々日本人には、予

五

供の時よりのみならず、祖先以來此文字によりて教育を受け、學問を習ひ、十分なる習慣と遺傳とがあるから、却て西洋の文字よりは、平易に學び得らるゝ道理である、されは我々に取っては、漢字より却て洋字の學が困難なる譯であります。

我々の腦髓は、祖先以來の遺傳と習慣とによりて、最も容易く漢字を印象し記憶し得らるゝ様に出來て居るは、勿論、眼球の組織までが、漢字を見るに適する程に生理上の順應が出來て居るに相違ない、夫故に近年の書生に近眼者非常に多きは、漢字を見る爲に、あらずして、洋書を讀む爲であることは、皆人の知る所であります、昔は暗燈で漢字を讀み、今はランプで洋字を讀むも、猶ほ昔日より今日の方に近眼病眼の者が多いとすれば、今日の學生に腦病患者多きは、洋書を讀む爲なりと申しても、一理ある様に考へます。

三 漢字は腦髓の發育に妨害ありといふを駁す

ふを駁す

帝國教育會の請願書中に、我邦の學生は漢字を學ぶ爲に、徒らに其學校生涯の大半を費して、他の有要なる知識を得るに暇あらず、然のみならず、此無用の日課の爲に、其銳氣を衰へしめ、其生育を妨くること甚た大なりなど、説き、又は漢字を廢せざれば、四千萬國民の能力は、之が爲に發育を害せられ、四千萬國民の事業は、之が爲に進歩を妨けられ、國家百年の利益と幸福とを毀損し、國家千歳の隆昌と福祉とを沮滯せらるべしなど、論ぜらるゝが如きは、ヒツクリ仰天の外ありませぬ、斯く申さば、失敬に當るかは知らざれども、其論法は嘘八百を並へ立てたるもの様に見えます、何せなれば、我々は漢字の爲に學校生涯の大半を徒費するどあるは、誰が見ても針小棒大的論法と思ふに相違ない、銳氣を損

し生育を害す等も、別に何等の證據あるにあらずして、論者自ら書く所の空想に過ぎませぬ。若し此説をして事實ならしめたならば、我邦にて應神天皇以來全く漢字を用ひずして今日に至らは、四千萬國民の腦髓は、白の如く大になり、全國到る處福助を以て充たす様になり、世間之を評して、嗚呼東海の福助國と呼ぶに相違ありません。若し之に反して洋字を用ふる國民は、皆銳氣大に揮ひ、知識大に進むとせば、希臘や西班牙などか、今日彼様に貧弱なる道理はない。兎に角其論法は嘘八百的にあらざれば、針小棒大的であります。

余は漢字は西洋人に困難なるも、日本人には左程困難ではないと信ずるものなるが、ヨシ一步を譲りて、多少の困難ありとするも、こは決して兒童の發育に害なきのみならず、却て益あるものと考へます。其譯は肉體の方より見るに、幼少の時より手に重きものを擧げたることなく、脊

に重きものを負ひたることなく、腫物に觸る様に、大事の上に大事を取りて、育てあげたるものと、幼時より多少の勞働を経て成長したるものと、孰れか強壯健康でありませうか、又子供の時より腸胃を傷はんことを恐れて、粥の如き柔かなるもの計り食はしめたるものと、然らざるものとは、成長の後孰れの腸胃が強くありませうか、そは肉體上の事なるが、若し之を精神上に考ふるも、幼時より其心中に何等の艱難を覺えず、毫も思慮を勞したることなきものと、勞苦を経て成長したるものと、孰れが智力の發達か宜しからうか、是等の疑問は、識者の判断を待たずして直に分ります。之と同じ道理にて、幼時の教育に多少の困難を経過するは、却て精神の基礎を固くする助けになるものなれば、漢字を學ぶ爲に、能力を減し、銳氣を損する等の心配は、全く無用の事と考へます。

(四)漢字は老朽せる文字なりといふを駁す

十
國字改良論者中には、漢字は太古の繪文字より傳來せるものなれば、今日既に老い去りて實用に適せず、恰も老衰したる人若くは朽ちたる木が、世の用に立たざるが如しといふものあれども、そは大なる間違である。漢字の初は太古の繪文字より起りしに相違なきも、其後度々變形して今日に傳はる以上は、敢て老朽の廉を以て排斥する道理はない、例へば人間は猿の先祖から變形し來りたりとて、其の廉を以て排斥するところが出來ぬと同様であります、余はもとより漢字を以て完全なる文字なりと信するものにあらざるも、西洋文字も亦不完全にして、且つ不便利なる所ありと信するものである、今後もし工夫に工夫を凝さば、西洋文字に數倍せる完全、且つ便利なる文字を發明するやも計り難い、故に余は漢字を廢するならば、今日之を實行せずして、他日絶對的完全なる文字の發明ある日を待ちたいと思ひます、

西洋の文字は語音を綴りたるものなれば、文字其物の形に就ては、何等の意味もありませぬが、漢字は元來繪文字より變化し來りたるものなれば、形の上に大なる面白味がある、洋字は音を主とし、漢字は形を主とす、形を主とするものは、目の感覺に屬し、音を主とするものは、耳の感覺に屬す、されば雙方共各一得ありと申して宜い、之と同時に、雙方共各一失あるに相違ない、故に他日此二失を除き、二得を合せて、別に新文字を組立つるに至らば、今日の漢字にも洋字にも數倍せる絶對的完全の文字が出來るでありませう、然し是は一朝一夕の研究や工夫の及ぶ所ではなく、今より五十年乃至百年の後を待たなければならぬ、然るに近日二三の有志者が、朝飯前か晝休時間に工夫したる新文字位を以て、千百年來慣用せる國字に代用せんとするか如きは、實に子孫百世の笑を招くのみならず、國家千歳の長計を誤るものなれば、余は飽まで之に反對せ

んとする決心である、世間の廣き識者の多き、必ず余と同感の人あらんと信します、

(五)漢字は字數夥多、字畫繁雜なりとい

ふを駁す

國字改良論者の漢字を廢する口實の一は字數夥多ありて、一々記憶し難しといふにあれども、字數の多きは漢字より洋字の方である、先づ康熙字典とウエブスター大字書とを相較すれば、ウエブスターの方に字數の多いことは、誰も疑ひますまい、且つ漢字は字書の上にて澤山ありても、實際用ふる文字は、其何十分の一である、其代りに熟語を作りて活用するから、字數としては僅に千字か二千字もあれば、之に幾十倍する文字を組立つることか出来る、是は漢字の調法なる一點であります、又改良論者は、漢字は字畫繁雜にして記憶し難しと申すけれども、それ

は西洋人の口吻を真似るものにして、漢字必ずしも然る譯ではない、多くの文字の中には、漢字の方に字畫の多いものもあり、洋字の方に字畫の多いものもありて、五十歩百歩の相違に過ぎませぬ、漢字にありては、古來より餘り字畫の多い文字は、通例略記を用ひ、體を休と略し、龜を尾と略し、雙を双と略し、邊を辺と略し、舊を旧と略するの類、多々あります、今後は自然の勢に任せても、ますます略記が多くなるに相違ない、從來は漢學者の弊として、無暗矢鱈に六ヶ敷文字を使用するを得意としたれども、今後其弊は追々なくなりて、字畫の少ない文字が日に増し行はるゝ様になりませう、其上に漢字には草書法があるから、早く書かんとするときは、草書體を用ふるが宜い、唯其字體の一定せざるには、誰も閉口して居るが、今後若し其法を一定するに至らば、餘程の便利を得るに相違ない、要するに今より略躰法草書法を改良して、從來より一層簡

便の方法を設くるに至らば、漢字を用ひても別段の不都合はないと考へます。然し斯る簡便法の如きは、世の必要に應じて自然に行はるゝものにして、世間の人々が未だ其必要を感せざる間は、實行することが出来にくい。恰も世間にて時間を確守するの便利を知らながら、實際上の必要に迫られぬ間は、實行が出来にくいと同様であります。

(六)漢字は發音に困難なりといふを駁す

漢字を排斥する理由中、尤も力あるものは、發音の困難と云ふ點にありとも、其困難は改良論者が囁し出てる程のことにはなからうと考へます。西洋の文字は假名にて綴りたるものなれば、一見忽ち發音が分るも、漢字は一々人に聞きて學はなければ分らぬ様である。さりながら漢字の發音には自然に一定の規則ありて、最初其音源となる數十字を記憶し

居れば、大抵他の發音を知ることが出来る。例へば扁の音ヘンなるを知れば、偏、徧、篇、編、編、編、其音皆ヘンなることが分る。至の音ケイなるを知れば、徑、勁、涇、莖、經、徑、輕、逕、其音皆ケイなることが分る。生の音セイ、青の音亦セイなるを知れば、性、姓、性、笙、及ひ清、晴、精、靖、靜、其音皆セイなることが分る。其中には一定の規則によらざるものあれども、其多くは五十韻の通音によるものである。例へば支の音シにして、枝、肢はシなるも、伎はキなるが如きは、通音である。又寺の音シにして、侍、峙はシ、持はチなるも同様である。可の音はカにして、何、呵、柯、河、舸、柯、哥、歌、荷、皆カなるに、獨り阿の音アなるも同様である。又兪は其音ユにして、儉、劍、嶮、險、險は皆其音クン歛、獨り其音レンなるも、皆通音であるから、敢て怪むには及びませぬ。サウして見れば、漢字の發音には、自然に一定の規則ありて、文字の左偏か右傍に就て讀むことが出来る。其中には往々例外の發音ある

も、大抵五十韻の通音に依る以上は、例外の規則を作る事が出来る、若し例外の例外の如きは、獨り漢字の發音に限るにあらざ、西洋語にもあることなれば、萬止むを得ざる次第であります、余か説にては、例外の例外にして、到底規則を以て律することの出来ざる分は、今後其發音を改めて差支ないと思へます、例へば、儒音ダを改めてシユとし、忸音ヂクを改めてチウとし、姪音タツを改めてタンとするも、格別の不都合はありませぬ、若し瘡音コツ、狀音イウ、疹音レイの如きは、不用の文字なれば、之を廢して宜い、斯くして字音を改正すれば、大に發音の困難を減ずることを得るに相違ない、又漢字に吳音漢音の二様あるも、普通に慣用せる音を本として、多少の修正を加へたならば、又幾分か困難を避くる事が出来るに相違ありません、余は漢字の發音の不規則なるは、教育上不便なることは、方々承知して居るも、此不便を避くる方法は、漢字教授

法の改正と、發音法の一定とを要するにありとの説を取るものなれば、國字改良論者と其意見を異にするは、万止むを得ざる次第であります、

(七)漢字は西洋語を譯するに不便なり

といふを駁す

漢字にて西洋語を音譯するときには、シーザーは該撒となり、ニユートンは牛童となるも、日本人には、サツバリ通しませぬ、故に改良論者は此點を以て、漢字の不便なる一例に計へます、然し我邦には漢字の外に假名文字あれば、洋語の音譯はすべて假名を用ひて差支ない、已に今日にても、實際音譯には假名を用ひて居ます、然るに又改良論者中には、假名にては日本人に通ずるも、西洋人に通せぬ、もし國字を改めて羅馬字となさば、西洋語を我邦に移すの便あるのみならず、西洋人をして我國語を學ばしむるの便ありて、一舉兩得であると申すものがあるが、こは先年羅

馬字會の起りたる理由であります、羅馬字を國字とすれば、一利あるに相違なきも、之を同時に一害も二害もありませう、其譯は後に述ふる積りなれども、今此に漢字排斥論者が西洋の一方を見て、自國の不便を顧みざる風あることを攻めなければなりません。

論者は我邦の學生が漢字を學ぶ爲に、幾多の歲月を徒費し爲に西洋學を修むることが出来なくなる、故にもし全く漢字を廢して羅馬字を用ふるに至らば、大に西洋學を學ぶに便利であると云ひ、甚しきに至ては、先年英語を以て日本の國語とするに如かずと云ふか如き、極端の論も起りたる趣なれども、こは大なる心得違にして、西洋あるを知りて自國を知らざる盲論といはなければならぬ、其英語主唱の如きは、國家の獨立上、言語の獨立の必要を知らざるものにして、且つ今日の改良論者の執らざる説なれば、辨駁する必要はないが、羅馬字に就ては一言を要し

ます、若し今俄に漢字を全廢して羅馬字を用ひ、小學及び中學の教科書を始め、日用の書類は悉く羅馬字にて綴りたるものを用ひんとせんか、然るときは我々國民は、英語なり獨逸語なり一二の西洋語を學ぶの不便は、今日と別に變ることはない、其上に更に漢字を學ぶの不便を増すことになる、其譯は我邦數千年來の書籍は皆漢字より成り、今日使用する言語は、多く漢字より來るものなれば、漢字を學ばざる不便は、英語を學ばざる不便に幾倍するか知れませぬ、西洋にて今日更に行はれざる羅^ラ旬^ン語^ン希^キ臘^レ語^クですらも、猶ほ之を學ぶ必要ありとすれば、我邦にて一旦漢字を廢したれば、とて、永く之を學ぶの必要があるに相違ない、左すれば漢字を廢して羅馬字を用ふる日には、一舉兩得ではなく、一舉兩損の不都合を來す譯である、若し假名のみを用ふるも、矢張右同斷である、若し假名にもあらず、羅馬字にもあらざる一種の新字のみを用ふる

ときは、一層不便を増すことになる、ナント馬鹿らしい改良ではありませぬか、

(八)漢字は言文一致を實行する妨にならぬといふを駁す

改良論者は、我邦が言文一致でないのは大に不便である、一定の標準語なきは不都合である、尊卑の階級によりて用語を異にするは、不便且つ不都合であると喋々するは、尤もの申し分にて、余輩も其事文には同意なれども、此不便を避くるには、漢字を全廢せざるべからずと斷言するに至ては、甚だ道理なき議論と思はる、斯る議論は、數にらみの論法と申して、大なる見當違であります、何せなれば、我國語に漢字を用ひたども、言文一致を實行するに何等の差支もない筈である、余輩などは、近來漢字を用ひながら多く言文一致體の文章を書きて居るから、今でも實

行しやうと思へば、すぐに出来るに相違ない、且つ余は國字改良よりは、寧ろ言文一致を實行することが、今日の急務であると考へます、然るに言文一致を後にして、國字改良を先にするは、先づ家屋を構造して、後に土臺を固むると同様にて、大に順序を誤るものである、若し言文の一致も、言語の一定も實行せずして、一時に國字を改變したならば、今日に幾倍する錯雜と困難とを引起すは、必然の勢であります、果して然らば、國字改良論の事業は、國字を改良するにあらざして、國字を改悪することになる、兎に角、今度の改良論は、其順序を誤るものに相違ありませぬ、言文一致の實行に就て余の意見を述べれば、今日の言語を標準として一致を期するも、又今日の文章を標準として一致を望むも、共に實行し難からうと考へます、即ち言文一致の標準は、言語の方でもなく、文章の方でもなく、言語と文章との中間に立てなくてはならぬと云ふが、余輩の

意見である、何せなれば今日の言語は錯雜冗長を極めたるものなれば、到底此儘を文章とすることは出来ぬ、必ず先づ言語を改良して、幾分か今日の普通文の方に近寄らせなければならぬ、夫故に余は國字改良よりは、寧ろ言語の一定が目下の急務であると申しました、たとひ他日國字を改良するにもせよ、先づ今日實行する點は、言語の一定と言文の一致とに留めて置きたい、改良論者は如何が考へますか、

(九)漢字は活字を組立つるに不便なり

といふを駁す

漢字全廢論の口實中最も取るべき點は、漢字は發音を知るに不便なりといふこと、漢字は活字を組立つるに不便なりといふこと、の二點に過ぎませぬ、其他は多く小針に棒大の理由や、嘘八百的事實を並へ立てたるまでにて、書生の空論に類し、毫も感服する點はない、其中活字の一

段に就ては、余も大に閉口して居ることなるが、是も文字の上にも多少の制限及び修正を加へたならば、今日よりは幾分か便利になるであらうと考へます、余は先年此事に關し、一場の演説を試みたることがある、其要領は漢字の偏ヘンと傍ボウと冠カンと脚キョウとを分解して、活字を組立つる方法でありました、漢字は通常用ふる文字の數、三千乃至五千ありとするも、其多くは一定の偏と傍、又は冠と脚とを組合せたるものなれば、活字の方には、一定の字原となるべきものだけを作り置き、之を組合せて文字を綴る様にすれば、今日よりも餘程の便利を來すに相違ない、今字書の目錄に依りて字原を算すれば、第一書より第十七書に至るまで、總計二百十四字ありて、之を組み合すれば、澤山の文字が出来る、例へば石と見とを合すれば、硯の字を得、木と木とを並ぶれば、林の字を得、雨と田とを重ねれば、雷の字を得るの類であります、此二百十四字だけでは不足なれば、

更に之に副原となるべきもの、二百字か三百字を選びさへすれば、大抵一通りの漢字を組立つることが出来ます、斯くして従来活字に三千字も五千字も要する所を、僅に五百字を以て辨する様にならば、大に印刷の困難を減するに相違ない、唯之を實行するには、多少文字の形を改變する必要がありませう、又横讀縦讀の都合に依りて、字形を一定することも必要である、若し縦讀ならば、偏と傍より成りたる文字を分解して、上下に重ねる様にし、横讀ならば、冠と脚より成りたる文字を分解して、左右に並ぶ様にするが宜い、先づ縦讀の方で申さば、松を桑にし、海を葉にせなければならぬ、若し横讀の方ならば、案を按にし、慚を慙にせなければならぬ、いよゝ此規則を實行するに至らば、文字の形の上にて一大變更を來すに相違なきも、漢字を保存しながら、活字を組立つるの便利を得ることか出来ませう、余はもとより漢字保存論者なれども、多少の變

更を字形及び字體の上に實行することは、免れまいと考へます、サツシて見れば、漢字は活字を組立つるに不便なりといふ攻撃は、少も恐るゝに足りませぬ、

(十)漢字を廢すれば有らゆる困難を避

くべしといふを駁す

改良論者は、我邦の言語は錯雜を極め、我邦の文字は多様を極め、普通用の文字たけにても、五千個以上あり、一字の音訓に數十種を有するあり、又一字に楷行草の三體あり、其草書にも色々の書き方あり、之に加ふるに漢字の外に、假字もあり、假字にも片假名平假名萬葉假名等ありて、假字丈にても二百餘種あり、其他文章の上には、和文體あり、職記文體あり、候文體あり、漢文書下體あり、洋文直譯體あり、言文一致體あり、又言語の上には、方言あり、俗語あり、尊卑の階級に應じて、言語を異にするあり、異

音によるもの漢音によるもの、吳漢兩音の混同せるものありて、其困難は言語にも筆紙にも盡し難いと申すは、餘り仰山に法螺を吹き立つる様なれども、それは暫く一理ありと許し、論者は此困難を避くるに如何なる方法を用ふるかを尋るに、漢字を全廢するに如かずと云ふ意見であります。是れは實に驚き入りたる御説と申すより外はない。もし今日漢字を廢したならば、言語文章の錯雜は今より五倍も十倍も殖るに相違ありませぬ。例へば此に情の字があるに、人情とつくとときは吳音にて讀み、風情と續くときは漢字にて讀むが如き困難は、國字を改良すると同時に避け得るとするも、其代りに情狀、上場、壤蒸の如き、同音の文字を區別することの出來ざる困難を引き起します。若し又頭の字に就て申すは、頭痛とつくとときはツと讀み、頭取とつくとときはトと讀むが如き困難は、國字改良の力にて除き得るとするも、其代りに頭、唐、東、燈

等、冬、壽の如き同音の文字は、兎ても讀み分けることか出來なくなりませう。是れ一の不便を避けんと欲して、二三の不便を招くと同様なれば、此位阿房らしい改良はありませぬ。論者は漢字に同音の文字が頗る多いことを知らざるか、其混雜は漢字を用ふるならば、字形字畫の異同によりて避くることか出來るも、若し漢字を全廢したる曉には、暗夜に鴉を探くるか如く、サツハリ分らぬものになりませう。故に余は國字改良論は、白晝を暗夜に變し、光明世界を暗黒世界に變する方法であると考えます。依て今後は國字改良論の名を改めて、國字暗黒論とするか宜い、無賛成者が多いであります。

(十一)漢字を廢すれば人心上に大異動を起す所以を述ふ

國字改良論者は十人は十人ながら、漢字の日用上に直接に與ふる不便

のみを列べ立て、更に漢字と人心との關係如何を問はざるは、奇怪千萬であります。世間の無學連中なら、もとより怪むに足らざるも、堂々たる碩學大家の看板を掲げて居る連中が、斯る皮相の淺見を以て、改良の必要を唱へらるゝは、實に驚き入りたる次第である。其上に堂々たる帝國教育會が之に賛同して、専ら其論を主張せらるゝは、奇怪中の奇怪なる一現象であります。

抑、抑言語文字は直接に人の精神思想に關聯し、其一改一變は必ず精神上に變動を引起すは、事實上疑なきことにて、縱令無學無識の輩と雖も、少しく詮じ來らば、其位の道理は分るに相違ない。然るに改良論者が衣服や食物の改良と同様に心得て、國字の改變を論ずるは、不都合千萬であります。凡そ何事にても、數千年來養成したるものを一朝にして改變する場合には、豫想外の利害を引起すものなるに、今言語文字は精神思想

を表示する第一の器械なれば、其改變と同時に人心の瓦解を招くは、必然の勢である。殊に漢字は千百年の久き、國語の基礎となりたるものなれば、之を一時に全廢する日には、國民をして其守る所を失はしめ、其向ふ所に迷はしむるは、疑ないと考へます。されば國字改良位世の中に恐ろしきものはないと申して宜い。有形上の利害は僅に一部分に止まることなれば、格別恐るゝに及ばざれども、無形上の利害は、廣く全軀の精神基礎を動かすに至るものなれば、大に恐れ、且つ深く戒めなくてはなりません。

我邦目下の急務は、萬國競争の間に獨立を維持するより先なるはなく、國家の獨立は、民心の一定より大切なるはない。而して國字改變の結果が、民心を動すに相違ないとすれば、今日之を斷行するは、頗る危険なる事と申して宜い。若し之を實行するならば、今より深く熟考して、國家の

獨立が萬全に達したる日を待たなければなりません、それは兎もあれ、國字の改良を、水道の改良や家屋の改築と同様に心得て、即刻一時に断行せんとするは、大々の誤見であると信じます。

(十二)漢字を廢すれば倫理上に大影響

ある所以を述べ

國字の改變は人心上に大影響あると同時に、道德倫理上に大なる變動を與ふるは、亦實際上争ふべからざる事實である、今其理由を述ぶるに、我國民の道德は、忠と孝とを基礎とすることは勿論であるが、此忠孝の觀念は、唯、語聲のみにて我々の精神界に保たれ居るでなく、其文字の形と共に、惱中に印象して存するものである、其證據は、忠と書きたる文字を見て之によりて起す觀念と、「チウ」若くは「ちう」若くは「Chiu」と書きたる文字によりて起す觀念と、果して深淺厚薄の異同はないか、如何であり

ませう、余は「チウ」でも「ちう」でも又は「Chiu」でも、決して「忠」の字の如き深き觀念は起らぬと信じます、若し「チウ」といふ語聲計りにては、漢字中に「衷」中、「仲」注、「紂」誅、「丑」稱の如き音相類するもの多ければ、是等の文字と混同する上に、假名文字や羅馬字にては、威嚴尊重を減することは、免るべからざる事實である、又「カウ」といふ語聲は、江、攻、講、降、考、岡、綱、巧、行の如き澤山の文字と混同し、且つ尊重の意を缺くに相違ない、唯「チウ」とか「カウ」とか云ふ音を聞いた計りでは、鼠の聲やら、鳥の聲やら、サツパリ分りませぬ、西洋の如き古來綴字を以て文字と定めたる國は、多年の習慣にて斯る恐は少きも、我邦の如き字形を主とする漢字を以て、道德の觀念を結び付け來れる國にありては、大に此點に注意することが肝要であります、更に一例を擧げて示さば、天皇陛下より下し賜はる勅語の如き、漢字を減して和語を多くする場合には、我々の心中に於て尊嚴を減する氣味

がある、之に反して漢字の多く加はりたる場合には、自然に嚴肅の感想を浮ぶる様になる、此事は日本人の皆熟知する所であり、故にもし從來の漢字を今俄に假名或は羅馬字に移し來らば、其結果必ず皇室國體の尊嚴を減するに相違ない、先年或人が、教育勅語の片假名を平假名にして謄本を作り、之を世間に發布したれば、勅語の尊嚴を減じたりとの攻撃がありました、又楷書を草書に直すときは、一層威嚴を缺くに至ると申します、片假名を平假名に變し、楷書を草書に變してすらも、此の如き影響ありとすれば、勅語全體を假名或は羅馬字に變したならば、如何様に至尊至重の觀念を減するか計り難いと思ひます、

改良論者は、或は是の如きは一時の習慣に過ぎずと見做し、其習慣は國字改良に伴うて自然に消滅する様に考ふることあらんも、こは大なる間違にて、決して一時の習慣どころか、祖先以來千百年の間養ひ來れる

遺傳的習慣なれば、一朝一夕に消失する道理はありませぬ、又改良論者は之を己れに試るに、左様の恐はないと申すかも知れざるも、己れ一人を以て世間一般を例するは無理である、世の學識に富みたる人には、斯る恐少なきは余の知る所なれども、學識に乏き中等下等の人民に至りては、道理の力より習慣の力によりて、己れの道德を維持し居ることは疑ない、而して是等の人民は、之を上等に比するに、其數最も多く、國家の勢力の九分通りを占め居るものなれば、一國の道德を維持するには、中等以下の人民に最も重きを置かなければなりませぬ、萬一此最多數人民の道德心が俄に動き出すに至らば、一國人心の瓦解は到底免れざることでありませぬ、

之を要するに、漢字は獨り國語の基礎となるのみならず、世道人心の根本となるものなれば、其一變一更は、世道の衰頹、人心の破裂を招くの恐

あれは、大に戒心を要する一大事である。若し果して此恐ありとすれば、愛國の男子は鼓を鳴らして、漢字廢止論者を攻撃せなければなりません。

(十三)漢字には種々の長所あることを

述ぶ

漢字の廢すべからざる理由は、其國語國文の基礎となり、其世道人心の根本となりたる故のみならず、漢字にはものづから漢字の長所と特色を有する故である。今其長所を擧げて申さば、漢字に限りて、文字の上に事物の分類が現れて居ます。是れは西洋語の遙かに及ばぬ所である。即ち漢字にて木偏にかゝる文字は木に屬し、艸冠に作る文字は草に屬し、人偏、口偏、火偏、虫偏等、皆其所屬の部類を現はし、文字を一見すれば、忽ち其意味の半を了解することが出来る。斯る例は余未だ他國の語中に

319425

見たことがない。例へば英語に *Serpent* とありても、英語を知らざる人には決して分りません。又 *fox* とありても、同断である。然るに漢語に蛇とあれば、一見忽ち其物の虫類なるを知り、狐とあれば又直に獸類なるを知ることか出来る。是れは餘程面白き組立であると考へます。一昧漢字には音訓の二様あるも、もし偏と傍より成立ちたる文字ならば、通例、偏は部類を現はし、傍は音聲を示すものにて、偏と傍の兩方を吟味し來らば、音訓の一通りは察知することが出来るに相違ない。尤も其中には例外的例も多きことなるが、斯る例外的文字には、一層面白き味ありて、自然一定の規則を作ることが出来る。例へば經の字は經理、經常と熟して、物事のズヂミチ、或は教の大本を義とするに、糸偏の部に屬するは、解し難い様なれども、其字はもと機つゝの縦糸を義とし、前後を一貫して變らざる點より、斯る意味を生したる次第である。又案の字は考案と熟し、カン

カフルを義とするに、木偏の部に入るは、如何と怪むものあれども、其字はもとツクエと訓し、木にて製したる机の一種にして、之に倚りかゝりて色々の考案を運らすより、自然にカンカフルの義を生したるに相違ない、又篇や簡の字が、竹冠の部に入るは、古代の書物は竹を編みたるものなることか分る、此様に一々漢字を詮議して見るときは、唯文字の音訓を知るのみでなく、古代の風俗歴史の一斑をも窺ふことが出来、故に漢字は一種の歴史と見ても宜い、オント調法の文字ではありませぬか。

其外漢字の組立に就ては、偏傍冠脚に各多少の意味を帯び、之を研究すればするほど、興味を覺ゆること、到底他邦の文字の企て及ぶ所ではありませぬ、例へば水の青きを清スガと訓し、木の相並ぶを林ハヤシと訓し、日と月と相合すると明アカツキと訓するの類は、一々計へ盡くすことは出来ぬ、忠は字

の如く中心の義である、孝は字形の如く子が老人に事ふる有様を示したものである、字は家の下に子の住する形にして、家庭教育の意を示し、婦は女子が帯オビを取りて掃除する意を示し、男は人が田にありて力耕する意を示し、正は一止にして、一を守りて動かさるを示し、王は三を一貫したる形にして、天地人の三に關係するの意を示す等、何れも面白き組立であります、故に余は文字の研究に就ては、世界中に漢字程面白きものはなからうと考へる、唯今日まで教授法其宜きを得ざる爲に、斯る深き興味あることを忘れて、不味の者となさしめたるは、如何にも残念であります、依て余は今後の國語上の急務は漢字廢止にあらずして、漢字教授法の改正であると考へます。

(十四)漢字には美術的興味あることを述ぶ

漢字は元來繪文字より變遷したるものなれば、文字其物に美術的趣味を有することは、疑ふべからざる事實である。先年或る雜誌に、書は美術であるとか、無いとか云ふ議論が見えたが、西洋の文字は、美術の仲間に入るゝことは六ヶ敷様なるも、漢字は確かに美術の一種であります。今日の漢字中、口、心、日、月、木、水、火、竹、艸、糸、目、耳、馬、鳥等の類は皆實物の摸形にして、一種の繪畫である。其他繪文字にあらざる分も、筆勢と云ひ筆法と云ひ、皆一種の畫風を帯ひて居る。楷書は止まるが如く、行書は行くが如く、草書は走るが如く、其間自然筆者の意象氣風を發顯して、或は緻密を示し、或は雄壯を現はし、之を見るものをして、畫に接すると同様の感想を浮ばしむるは事實である。夫故に支那及日本の如きは、古來文字を額面や幅物に仕立て、繪畫同様に賞玩し、よく漢字を解せざるものすら、之を見て興味を感ずる。是れ漢字其物に美の意味を具して居るからであ

ります。支那及日本に文人畫と申すものあるが、漢字を草書風に書きたるときは、稍之に近き様に思はる。故に漢字は一種の文人畫と見てよからうと考へます。

或は西洋流義の論にては、文字に美術性を帯ぶる必要なしと云ふものあるべきも、言語と文字とは一躰兩用の關係ありて、相離るべからざるものなるに、言語の方は、發して詩となり歌となり、以て美術を形作る以上は、文字に美術性を帯ぶるも、決して不都合なる道理はあるまい。却て人をして興味を感ぜしむる益があります。斯くして文字其物に美術的興味を具するとき、自然に人の注意を引き、記憶を強くする助となるものである。故に此點は漢字の便利なる一例に計へて宜い。今我日本にては、漢字に交るに國語の假名を以てするは、一層便利なるに相違ない。一文中にて主眼なる文字は漢字を書し、其前後の連絡は假名を以てす

る故、一見一過容易く文意を一握することとが出来ます、是れ又我國文の西洋文に優る所である、之を要するに、文字其物に種々の興味を具し、書風に一種の美術性を帯ひて、人の注意を引き記憶を助くる一段に至ては、西洋文字が遙に漢字に及ばざる所である、然るに假名字や羅馬字や新林文字を以て、之に代用せんとする加如きは、恰も錦衣を脱して木綿を着し、黄金を捨て、眞鍮（シニヤ）を取るの類にして、笑ふべきの甚きものであります、

(十五)漢字を用ふれば日本の特性を保

存する益あることを論ず

漢學は漢字によりて傳はり、漢字は漢學によりて行はれ、兩々相離るべからざるものなるは申すまでもない、其上に我日本の數千年間の學問技藝は、皆漢學及漢字によりて今日に傳來し、道德人倫を始とし、我々の

風俗氣質に至るまで、皆此學此字によりて維持し居るは疑なき事實であります、サウして見れば、今日漢字を全廢すると同時に、我百般の事物の上に一大革新を見るは、勢の免るべからざること、信します、果して然らば國民をして、漢字の存否の問題は實に國家の一大事にして、決して輕々に看過すべきものにあらざ、又一朝一夕の速斷を以て決行すべきものにあらざること、を知らしめなくてはなりません、

我邦の學問は漢學漢字より成り、我邦の歴史は漢字によりて傳へたること事實にして、我古今數万の書籍は皆漢文又は漢字交り文によりて今日に存するとは、是れ又事實である、然るに若し一朝にして漢學を全廢するときは、此數万の書籍は之を反古として焼き棄るか、左なければ新國字に反譯して、印刷せなければならぬ、縱令其反譯は容易く出來得るとするも、漢文漢字の流行する今日にありてすら、なか／＼讀み下す

に六ヶ敷文句か假名文字又は羅馬字計りに變したる日には、尤で分らぬことになりませう、サウすると、我々國民は國字改良と共に、一度は暗黒世界に入ることには免れませぬ、即ち我邦の Dark Ages に来るのである、是れ余が今日の國字改良論は光明世界を變して暗黒世界にする方法なりと、大喝一破したる次第であります。

既に我々は一たび暗黒世界に入るに相違ないとすれば數千年來養ひ來れる日本國の特性も、日本國民の特性も、一時全く消失するに至るやも計り難い、先きに述べたる忠孝の大道を始とし、一國特殊の國體、尊皇愛國の精神までが動き出すかも知れない、是れ深く憂ひ、且つ恐れざるべからざる一大事であります。

凡そ愛國の至情と申しても、其國の昔を知りて、之を慕ふの情を離れて別にありますまい、余輩が鎌倉に遊び、吉野に到りて、其地を愛慕する情

を引起すは、歴史上及學問上、其昔を知る故である、之と同じく國家を愛慕する情も、古人の書を読み、古代の事を知るより生ずるに相違ない、然るに一たび暗黒世界に入る以上は、此情を生ずる源泉を失ふことなれば、我國民の元氣の一時沮喪するに至るは、必然の勢であらうと考へます。

先きに一言せしが如く、漢字は字形を主とし、且つ其字形最も人の注意を引くに適する文字なれば、我々の一念一思、皆其字形と連帶して我胸中に留まるものである、されば、忠孝の人倫を始とし、すべて日本人の特性長所は、此漢字によりて今日に存するに相違ない、故にもし其特性長所を永く百世に傳へんと欲せば、漢字漢學を保存せなければなりません、余歌て曰く、

漢字は我邦の日月なり、其西山に没したる夕には、天地晦冥、四隣暗黒

を現すべし、

而して此没日を促して、我邦の歴史上にダークエービスを作るものは、國字改良論者に相違なからうと思ふ、愛國の男子は兎ても鼓を鳴らして之を攻めすして居ることは出来ませう、

(十六)漢字を用ふれば東亞の勢力を占

むるの益あることを論ず

漢字を用れば、國內に於て日本の特性を維持するの益あるのみならず、國外に對しては、東亞の勢力を占領するの益あること、又疑ないと思へます、東洋にありて邦土最も大に、住民最も多きは、何れの國であらうか、支那帝國である、我日本と最も密切の關係を有するものも、矢張支那帝國である、而して其人民は開闢以來漢字漢語を用ふるものなれば、將來我日本が支那内地に入りて利を占むるには、今より一層漢學の研究を

奨励せなければならぬ、支那及び其附屬の國々を合すれば、漢字を用ふる人種の數は、四億人乃至五億人に下るまいと思ふ、もし世界の人口を十五億とすれば、漢字を用ふる人民は、其三分一を占むる譯である、漢字の需用の大なるは、之を推して知ることが出来ませう、斯る多數の人民が東洋に生存する間は、世界に漢字の勢力あるは疑ないことである、故に日本は他國の關係上より見るも、漢字を用ふる方が便利なること明かであります、

西洋は我邦百般の事物の仕入場にして、支那は我賣捌の得意場である、然るに若し西洋諸國に賣捌の得意を作らんとするものあらば、大なる間違にて、これは勞して功なく、損して益なき骨折であります、商業でも工業でも、學問でも、醫術でも、日本四千万の國民だけを相手にしては、舞臺が狭くて仕方がない、是非とも支那を相手にせなければならぬ、將來

の日本人は必ず支那を己れの工場と心得、彼處にて金儲けする目的が肝要である、されは漢字の將來は實に望の多いことであり、英國人は印度を以て己れの金穴富源とすると申すが、我日本人は支那を以て己れの金穴富源とするか宜い、支那は今日尙ほ世界の文明を入れざる有様なれども、數年の後には必ず開國革新^{カク}を實行するに相違ない、其時は我々日本人は、支那人の先輩なれば、彼れが教師となり、導者となることが出来る、且つ支那人は己れと全く文字文章を異にする西洋人よりも、之を同ふする日本人を歓迎するは疑ありませぬ、例へば我々が英語にて書物を書きても、之を西洋人に賣り付けることは六ヶ敷い、然れども漢文にて綴りたる場合には、將來支那に販路を開くことは容易いと思ひます、已に今日にても、日本人の著述が支那に行はれ爲に、大層の金儲したものがあると云ふことなるが、ナンデモ日本の將來は支那を相

手にせなくてはならぬ、支那を相手にするには、漢字を保存し漢學を奨励せなければなりません。

又政略上之を考ふるも、東洋にありては、臺灣人をして永く我に歸依せしめ、朝鮮人をして永く我に心服せしめ、支那人をして永く我を歡待せしむるには、漢學を興し、儒教を盛んにするより、外に良策はない、又將來支那四百餘州をして、我版圖に歸せしむるも、此外に名案はない、支那人は一般に家あるを知りて國あるを知らず、孔子あるを知りて帝王あるを知らざる風なれば、我邦にて孝道を大切にし、孔子を崇拜することを以て之に示さば、彼をして容易く我に歸服せしむるに至りませう、而して漢學と儒教とを振起するには、是非とも漢字を保存せなければなりません、サツして見れば、日本が支那四百餘州を一統して、東洋の最大帝國となるは、國字改良論者が仇敵視し、蛇蝎視し、ハスト視する漢字の保存

に在ること明かであり、果して然らば政略上より之を觀るも、漢字保存の急務なること青天白日を見るより尙ほ明瞭なりと申して宜い、斯くして愈、四百餘州を一統したる上は、漢字を廢して新字を用ふるも、國家の爲に別段の不都合はなからうと考へます。

(十七)漢字と教育との關係を論ず

我邦の學問は全く漢字によりて傳へ、和文學或は國語學と稱するものも、凡そ八九分通りは漢學漢字に基くものなれば、一旦漢字を廢したるときは、教育上に非常の不便を與へ、不都合を生ずるは勢の免れざる所であります。故に漢字全廢は教育の進路を妨礙するものと見て宜い、國字改良論者は、我邦の學生は教育上西洋語を學ぶ外に、最難至困の漢字を學はざるを得ざる不便あるを以て、此有様にては到底西洋と並進行することは難い、是非とも子孫百世の爲に漢字全廢を斷行せざるべ

からずと申すけれども、先きに述べたるが如く我々今日の困難は漢字を學ぶの點に、あらずして、洋語を學ぶの點にあること明かである。然れども是れ我邦の進歩の西洋に後れたる故なれば、万止むを得ざる次第にして、其不平を漢字に向て訴ふるは、大なる見當違である。若し我邦今日の進歩が、西洋を超越して其上に位する様ならば、我々に於ては西洋語を學ぶの必要なのみならず、却て西洋人をして日本語を學ぶの必要を感じしむるに相違ない。我々は日本の將來に對し、早く洋語を學ぶことを止めて、西洋人に我國語を學はしめんことを望むものである。世の教育家たるものは、斯る見識を有すること、國家の爲に肝要であると考へます。

近來教育家たるものが、餘りハケ間敷西洋人の口氣を眞似て、漢字は困難なり、恐るべき文字なり、能力を損し發育を害する等と言ひ觸らすは、

却て教育上に害ありと思ふ、近年の書生に病人多きは、醫者や學者が餘り衛生を八間敷く言ひ立て、病氣を恐しき様に述へ立つるからである、即ち神經の爲に病氣を呼び起すものが多い様に考へます、之と同じく漢字の困難を喋々するは、或は兒童の精神を害するの影響あるかも知れない、故に余は毫も困難など言はずに、小學兒童に漢字を教へ込めは、別に何等の妨碍なしに、學力の發達を見ることが出来る、と考へる、殊に我々日本人には幼少の時より漢字を印象するに適する腦漿を遺傳して居るものなれば、之に漢字を教へ込に少しも躊躇するには及びませぬ、且つ余が前に述ふるが如く、幼少の教育に多少の困難を課するは却て其腦髓を健全にし、思想を強壯にする基となるに相違ない、然るに改良論者が赤き犂ヒキを持ちもせずして、西洋人を氣取り、彼是批評するは、本氣の沙汰と思はれませぬ、論者は維新前後の日本人が、長き年月の間

漢字を學び、後に洋學を修めたるものに就て、果して何程の能力を失ひ腦髓を損し、銳氣を傷ひたることを調査せしか、もし其調査なくして漢字の害を述へ立つるは不都合の申し分ブツではありませんまいか、余は却て日本人の腦髓の土臺を固むるには、最初より四角の文字の教育を授くるが宜いと考へて居ます、其他教育上の德育と漢字との間に大關係あることは、前に述へたる所によりて大抵推測し得ることなれば、之を略しませう、

(十八)漢字と宗教との關係を論ず

宗教家は己れの信する宗旨其物と、利害を一にするものなれば、宗旨以外の漢字の存廢は、敢て關係するに及ばぬ様なれども、決して左様ではありませぬ、余を以て之を觀るに、漢字廢止は佛教の弘道クワダウに害ありて、耶蘇教の傳播フクハツに利あることと考へます、故に佛教家に取ては、飽まで此

問題に反抗せなければなりません、今其理由を述ふるに、第一に佛教の經論は皆漢字漢文より成り、其原本は今日に傳らざるもの多く、三千年古佛所説の遺教は、世界の國語中獨り漢字に依て其命脈を今日に保つと申して宜い、若し之を人身に喩ふれば、佛教は精神にして、漢字は神經機關に當る、故に他日漢字を全廢するに至らば、佛教一たび死滅に歸する道理であります、第二に我邦に佛教の勢力あるは、千數百年間の歴史と習慣とを有するからである、然るに其歴史と習慣とを維持し來れる漢字の、一たび廢絶に歸する日には、佛教は手足五官を失ひたる廢人同様になるであります、第三に宗教の信仰は、多く文字の細チホや鎖クワシによりて人の心中に結び付けらるゝものにして、佛教信者の佛教に對する觀念は、漢字漢語の力によりて、心面に其形を留むるものである、故に一たび漢字を放逐ハツソクしたる曉アキラカには、佛教上の信仰に一大變動を來すは、必然の勢であります、

以上の上の三大理由は日本佛教に限ることである、若し世界の佛教より言へば、漢字廢止の如きは、敢て憂ふるに足らぬ様なれども、今日大小乗の經論は、世界中漢字を離れて讀修する道なく、一乘三乗の教理は、万国中日本の外に研究する地なきこと明かなれば、漢字の存廢に關して、佛教主義の者は、決して傍觀坐視することは出来ずまい、或は日本佛教の世界万国に普及し難きは、其經論書籍の西洋に通せざる漢字より成るからである、故に今にして漢字を廢するに至らば、佛教は自然に西洋語に反譯の便を得て、早く洋人の心中に入るの幸を見んと申すものあれども、こは佛教の實際を知らざる書生論である、凡そ何事にてても一大變動あるには、必ず之に對する準備が入ります、例へば己れの家を毀コボたんとするには、必ず他に移住すべき家が入ると同様であ

る、然るに未だ西洋語に反譯の準備なくして、永く佛教の住家たる漢字を廢するは、恰も他に移るべき家なくして、己れの家を毀つか如く、自ら路頭に迷ふ計りでなく、必ず大に世間の笑を招くに至りませう、國字改良論者は、或は言を設けて、今より漢字廢止に着手するも、其成功を見るは五十年百年の後ならん、故に斯る長き歲月の間には、佛教を西洋語に反譯する準備は、必ず出來るに相違ないと申すかも知られども、今日もし漢字廢止が輿論となりて、一たひ社會に勢力を得るに至らば、世間益、漢字より成れる佛書を讀むことを厭ひ、從て佛教を遠くる様になるは、必然の勢である、故に佛教家は漢字廢止の實行を見るに先ちて、絶對的に其論に反對し、之をして社會に勢力を得ざらしむる様に努力せなければなりませぬ。

(十九)日本國は漢學國、日本國民は漢學國

民なることを論ず

漢字と漢學とは相離るべからざるものなれば、此に我邦と漢學との關係に就て論ずるも、決して無用の言でなからうと思ひます、先づ歴史上我邦の人倫道德は勿論、百般の文物は、大抵皆漢字によりて傳へ來りしことは、今更云ふに及ばぬ、然るに明治維新以後、西洋の文物を我邦に入れ、上下争て洋學を修むる様になりたれば、人皆漢字大に衰へ、漢學者殆んど地を拂ふに至りたりなど、申すけれども、余は左様にあらずして、漢學依然として盛んに、漢學者依然として多いやうに考へます、其故は、今日我邦に行はるゝ洋學と漢學とは孰れが盛んに、今日我邦に存する洋學者と漢學者とは孰れが多いかを尋るは、洋學は遙かに漢學に及ばぬことは直に分ります、例へば東京に於て西洋のアルハベツトより始めて、三年間洋學を勉強し、歸りて地方に到れば、自ら洋學者を以て任じ

人もまた洋學者を以て待遇し、立派に洋學の教師となるを得るも、地方にて多少漢學を學びたる者が、東京に來りて、更に三年間漢學を學びたりども、地方に歸りて、兎ても漢學者の看板を掲ぐるとは出來ますまい、其れは如何なる譯かと云へば、我邦は全軀漢學國にして、洋學國にあらざ、我國民は悉皆漢學者にして、洋學者にあらざる故であります、近來都鄙の別なく、和學が大に流行する様なれども、之を漢學に比すれば、流行せぬも同様である、其證據は和學を三年間も勉強すれば、和學者然として、學者を氣取ることが出来るも、漢學ではサウいう、旨い譯には參りませぬ、是れは畢竟、日本人は悉く漢學者にして、和學者にあらざる故であります、果して然らば、我邦には漢學は依然として行はれ、漢學者は依然として存すと云て宜い、然るに何くの阿房が、漢學衰へたりなど、申すのであらうか、昔時は百姓町人などに、四角の文字が全く讀めない

連中が多くありましたが、今日は多少漢字の讀めないものはありませぬ、左すれば漢學は昔日より今日の方、却て流行なりと申しても、差支ない、我邦は其様に漢學國であるのに、漢字全廢などとは、實に恐れ入り谷の鬼子母神であります、

國字改良、漢字廢止を主張する連中を見るに、何れも多少の漢學者にして、其中には堂々たる一家の儒者然たるものもあるのに、漢字廢止など、云ひて觸れ廻るは、チト受取り難い次第である、其れは兎もあれ、改良論者が口に漢字廢止を唱へながら、其著書も其書翰も、其名刺も、皆漢字を用ひ居るは、自家撞着ではありませんまいか、帝國教育會が大に國字改良に賛成して、國會へ請願書を提出し、其文中にはメチャクに漢字を攻撃し、漢字の不便不利なるを認めて之を排斥するに於ては、何れも皆一致せりとまで吹き立てながら、其文章に漢字を用ふるは、自家撞着の

限りではありませんまいか、若し帝國教育會が漢字の不利不便を認めて、之を排斥するの必要を感じたならば、先づ自ら發行する雜誌に悉く漢字を除くが宜い、且つ又之に賛同したる會員は、己れの名刺も書翰も悉く漢字を除く様にするが宜い、祖先の墓や石碑の漢字も皆新文字に改ては如何、然るに自ら之を實行せずして、人に計り漢字廢止を勧めんとするは、實に自家撞着のみならず、言行一致せざることになり、且つ人に對して自信の薄きを示すことになり、要するに、國字改良論者は己れ漢學の中から生れ出て、日常漢語を話し、漢字を用ひ、漢學の厄介になり、恩義を受けながら、漢字全廢などを主唱するは、自家撞着的の謀叛人であり、余輩は不肖と雖も斯る謀叛人と席を同うすることは、決して快しとせざる所である、依て教育會を脱會したが、世間必ず余と其感を同うするものがあらうと思ひます。

(二十) 明治の維新は漢學の活用なること

とを論ず

近來説をなすものありて、徳川時代に國勢の衰へたるは、全く漢學流行の結果にして、日本人は長く其中毒に苦しめられし故、今後は根本から漢學を撥絶せなければならぬと申しますが、余は明治の維新は、全く漢學によりて養ひたる精神思想の發揮せるものと思ひます、先づ我邦の尊皇を唱へたる藤田東湖、佐久間象山、吉田松陰等何れも堂々たる漢學者である、幕府の大政を握りて開港を主張したる井伊大老も漢學者である、西郷も木戸も勝も漢學者である、維新の元勳は一人も残らず皆漢學者である、今日の内閣大臣も皆漢學者である、其中には多少洋學を兼ねたるものもあれども、其學識を分析して見たならば、洋學より得る部分より、漢學より得る部分の方が多いに相違ない、伊藤侯や井上伯は、元

勳中の洋學者を以て聞ゆる人物なるも、其腦中に貯藏せる洋學の目方と漢學の目方と、孰れが重いであらうか、必ず漢學の方が重いに相違ない、其證據は伊藤侯は立派に支那の詩を作り、文も綴らるゝが、兎ても西洋の詩や文が、是程に出來はしますまい、依て元勳中の洋學者を以て目せらるゝ人は、皆漢學者なることが分ります、果して然らば、明治の維新は勿論、明治の初年より三十餘年の間に、古今萬國に比類なき長足の進歩をなし、西洋が數百年間掛りて漸く進めたる文運を、我邦は僅々數十年の間に之を進めたるは、皆漢學者の功勞にして、漢學の活用なることは、争はれざる事實であります、然るに漢學の中毒などゝの批評は、途方途轍もない妄評である、余は日本の元勳は漢學元勳、日本の内閣は漢學内閣、日本の親任官は皆漢學親任官であると思ひます、此の如く漢學の功勞の著く、活用の盛んなるにも拘らず、天下一般に其

學を排斥し、其字を拒絶せんとするは、所謂不仁不義の恩知らずにして、余が之を自家撞着的の謀叛人と呼ぶも、其當を得たるものと信じます、且つ其口實には、漢學を斥け、漢字を廢せされは、國民の知識を高め、思想を進むることが出來ぬと申す様なるが、既に今日まで斯く知識思想を進め來りしものを有罪視するとは、實に冤罪も甚しいと申さなければ、なりませぬ、維新後數年を経るに従ひ、漢學に多少の洋學加はりたれば、其進歩の一半は洋學の功に歸するとするも、維新前は勿論、其初年に於ける學問は、純然なる漢學にして、毫も洋學を交へざるに、數年を出でずして、全く別天地を見るに至りしは、漢學の活動の偉大なるを證するより外はない、若し何故漢學に斯る活動を有するかを考れば、孔孟以來儒教の胎内に宿れる一大勢力の發顯に相違ない、其勢力は論語の上にありては、内に含むも外に顯れて居ませぬ、中庸孟子の上に来りては、或は

博厚高明といひ、或は浩然の氣と云ひて、之を文面に顯して説き、其後相傳へて宋朝に至れば、程朱の理氣説となり、明朝に至れば、陽明の唯心論となり、或は文天祥の正氣の歌、東湖の正氣の歌等、皆支那哲學の精神を詠したるものである。我國民の元氣は全く此學説によりて養はれたるものにして、よく之れを實際に應用したるは、明治の維新であります。支那は斯る哲學を有しながら、其末に走りて本を忘れ、日本はよく其精神を發揮し來りたる故、支那に先ちて、國家の文運を此の如く盛んならしむるを得ました。管公の語に、和魂漢才といふことがあるが、其和魂を保護し養育し發揮して今日に至るものは、全く漢學である。又我邦の人倫に忠君を本とし、忠孝一致を主とするも、儒教の人倫が此邦に入りて、養ひ來れる結果に相違ない。元來儒教は孝道爲本の立て方なるが、日本に入りては、一家の上に孝道を説くのみならず、一國の上に孝道を説くの

必要がある。其譯は我邦は支那と國體を異にして、一國恰も一家の如く、四千万の國民は皆兄弟の間柄アノカタである。又皇室は我々の宗家にして、天皇陛下は宗家の御主人、即ち我々の大なる親様であります。故に我々が陛下に對して盡す道は、孝の大なるものに當る。是より忠孝一致の説も起り、水戸流の學風も起りました。然し此事はトテモ一言半句にて盡くすことが出來ぬから、他日別に論ずること致しませう。之を要するに、日本今日の隆盛は、漢學の精神の發揮活動に由ること明かであるに、其功績キコキを和學者や洋學者に奪はれたる氣味あるは、漢學の爲に残念に思はれます。斯る功勞の多い漢學を、漢字と共に排斥するは、實に恩知らずの不忠ものと申すより外はない。尤も國字改良論者は、漢字を廢する丈にて、漢學を排するにあらずと申すかも知れぬけれども、漢字を排すれば、漢學は、無論絶滅することなれば、此に漢字不可廢の一理由として、漢學

の功勞を述べたる次第であります。

(廿一)漢字教授の方法を論ず

余は此くの如く絶對的に國字改良論に反對するも、從來の漢學者の如く矢鱈に六ヶ敷文字を並へ立つることは、大不賛成である。又漢字の教授法の一定せずして、其極めて迂濶なる方法を取るは大不服である。是等の點は多少改良論者の意見と一致するであらうと思ひます。帝國教育會の國字調査中に、漢字節限部があるが、此節限と云ふことは、余が年來の持論なれば、もとより同意である。其他言語の一定、言文の一致等は、昔余が主張する所なれば、是れ又改良論と一致することでありませぬ。然るに余が之に反對する所以は、要するに其改良の目的方針が漢字全廢にあると、其方法手段が順序を誤るとの點に歸します。且つ帝國教育會の請願書を見るに、漢字を蛇蝎視する語氣ありて、其論往々棒大に失し、

偏見に陥り、自然に俗人を瞞着せんとする風があり、之に加ふるに其改良の方案に於ては各其説を異にすと雖も、漢學の不便なるを認め、之を排斥するに於ては、何れも皆一致せりと結ぶに至りては、余が不同意を唱へ、大反對を鳴らす所以であります。

先づ漢字制限に就ては、余は凡そ小學校にありては千字乃至二千字を限り、中學校にありては二千字乃至三千字を限り、高等學校にありては三千字乃至四千字を限り、其以上の専門にありては、五千字以上を用ふる位に致したひと思ひます。而して此制限法を實行するに就ては、先づ小學校の教科書は必ず所定の千字乃至二千字以内の文字を用ふることとし、小學校用の字引は其所定の文字を集めて作ることをし、中學校乃至高等學校の教科書も、之に準して二千字三千字若くは四千字以内を限ることとするが宜い。地名人名の讀みにくい分、若くは制限外の分

は、從來の文字を改めて差支ない例へは但馬は田島に改め、伯耆は方喜に改めてよからう、人名も正成マサナリをマサナリと読み、正行マサユキをマサユキと読む様にしても宜い、苗字村名の読み難きは、皆此例ナラフに倣て改變する様にすれば、漢學を廢せずとも、餘程便利になります。

其外漢字の教授法を改良することが今日の急務であります例へは小學所用の漢字を千字乃至二千字に限るも、之を今日の如き不規則、或は迂濶の方法を廢して、生徒の知識に相應せる順序を立て、教授すれば、千字や二千字位は容易く覚え込ことが出来る、其上に漢字の組立の錯雜なるものは、一々解剖して其意味を説明する様にすれば、生徒も大に興味を感じ、一層容易く記憶する様になります。

漢字に吳音漢音の兩様あるに就ては、成るべく普通に用ふる音を取って一定するか宜い、中には吳音にても漢音にても記憶し難きものあらば、記憶し易き音に改めて宜い、又發音の規則を作りて、偏より音を發するもの、傍より音を發するもの、或は此例によらざるもの等と、部類を分けて教授するが宜い、斯くすれば、漢字發音の困難を避けることが出来ませう、又字訓の方も、是までは一字に就て色々不用の訓を附したれども、今後は之を除き、其最も主要なる訓のみを存する様にすれば、是れ亦便利を得ませう、右等はすべて小學用字引、中學用字引を作りて一定すれば、必ず實行の出来ること、信します。

(廿二)國語改良の方針を論ず

余は日本の將來に對しては、國字改良よりは國語改良が急要であると思ふ、國語の改良を實行せずして、國字を改良せんとするは、大に順序を誤るものなりとは、余の意見であります、近年一般に國文の學問が流行する様になり、今日に行はれざる色々の古言や雅語を持ち出し、却て従前の漢

學一方の時より混雜を増す様になりました。既に死したる雅言よりは、今活きて居る國語と本をし、之に多少の修正を加へ、言語の標準を定め、然る後言文一致を實行するが改良の順序でありませう。既に前にも述べた通り、縦令國字を改良するにもせよ、言語の一定言文の一致は眞に先決問題である。此先決問題を措で、後決問題をかつぎ出し、神田の祭然として騒ぎ立つるは、實に氣の程が知れませぬ。すべて物事は近きより遠きに及ぼすが順序なるも、國字改良論者は遠きより近きに及ぼす順序を取る様に見ゆる。斯くすればとて、今日の困難を減ずるところでなく、一層も二層も多くするに相違ない。ナント驚き入りたる改良ではありませまいか。其上に國字を改良したる曉になりても、我々は一方には洋語を學び、一方には漢字を學ぶの面倒は依然として殘るに相違なく、小學時代に幾分の樂をして中學以上に一時に重荷を負はさるゝ様に

なり、全國到る處腦病患者が溢るゝ様にならうかと案じます。國字改良に就て今一ツ注意を願ひたきは、前にも一言したことなるが漢字は字形を主とする爲に字體大に異りて、字音相似たるもの甚だ多い。若し之を西洋の如く、綴字法に變したならば、意味の取れない文字文句が澤山出來ませう。今其一例を示さば、漢字の音にシヤウ又はシヨウ又はセウ、又はセフの別あるも、之を羅馬字に綴るときは、何れも同じ語となる。然るときは左の數十字の區別を立つることが出來ず、爲に非常の混雜を生ずるに相違ない。

松、鐘、衝、蕭、消、宵、樵、焦、椒、燒、照、昌、章、觴、裝、莊、償、傷、牆、樟、彰、庠、裳、障、承、昇、勝、稱、小、梢、象、將、掌、賞、商、訟、誦、笑、相、尙、醬、妾、唱、證、

談話の節は發音の調子や前後の語聲によりて、此等の混同を避くることとが出來るも、文章の上にては之を避くることは六ヶ敷い。若し漢字を

存すれば、字形の上にて速かに區別することが出来ます、
左に余の國語改良に關する方法を列擧すれば、

第一に普通の言語を一定すること

第二に言文の一致を實行すること

第三に漢字の制限を定むること

第四に漢字の音訓を規定すること

其他假名に就ては、平假名、片假名の兩様を存し、萬葉假名は一切之を廢し、通常の言語は漢字と平假名にて綴り、外國語の音譯などは片假名を用ひ、勅語祝文祭文などは漢字に片假名を交ゆることゝしたいと思ふ、且つ漢文の字畫の複雑なる分は成るべく略體を用ひ、草書は成るべく一定の書體によりて、分り易きを擇び、書翰文は成るべく普通の文體に近寄る様に改めたいと思ふ、是れが余の國語改良に關する意見の大略

であります、

(廿三)以上の所論を結ぶ

抑、國語改良論は今日俄に起りたるにあらざして、明治の初年より時を隔て、折々社會の上に推し寄せ來る一大潮流である、先年假名の會の起りたるときは、其潮勢全國を一捲にせんとする有様なりしが、一時の後其勢一變し、驟て羅馬字の滿潮を引起し、會員の數、万餘に達する勢でありました、然るに此羅馬字の火の手も、數年を出でずして下火になり、其反動として却て漢學の再興を見るに至り、轉じて國學の勃興を來すに至りました、是より後、漢學國學共に並び行はれ、誰ありて別に國語改良を唱ふるものもなかりしが、内地雜居に伴ひ、更に漢字廢止の聲遠近に起り、新字を工夫して之に代へんとする説出で、先年の假名の會、羅馬字會の連中も之に唱和して、漢字攻撃の聲漸く高く、其徒遂に相合し

て、國字改良會を組織する運びに至り、爾來漢字を排斥し嫌惡すること、毒蛇惡龍よりも甚しく、己れ自身は漢字の胎中より生れ出でながら、其恩を忘れ義に背き、矛を倒にして之を攻むるが如き謀叛人が四方に現はれ、余の如き局外者ですらも兎ても默然として傍觀坐視することが出来なくなり、依て此に漢字不可廢論を述べて、改良論の不道理なる點を一々辨駁しましたる次第であります。若し其要を擧て申さば、改良論者が西洋人の批評を口實として立論するは、大に其當を失すること、彼等は日本人に遺傳的習慣の存するを知らざること、彼等が國語改良の順序を誤ること、彼等が國字改變の世道人心上に與ふる影響を説かざるは、大に不都合なること等であり、之に加ふるに漢字にはあつから一種の長所ありて、西洋の文字も遙かに及ばざること、述べ、我邦の文章は漢字に假名を交ゆるものに定むべきことを述べ、終りに

至りて余が國語改良の方法を示しました、

余の漢字保存に關する意見は、國字改良論者の意見の如く、狹隘なるものにあらざりて、非常に遠大なるものである、先きに一言せしが如く、今後は獨り漢字を保存するのみならず、漢學を獎勵し、多年の後には、支那四百餘州を一統して、東洋の最大帝國となり、然る後に國字改良を議して、遅しとせぬと云ふ意見であります、漢字は完全なるものにあらざること、は、言ふまでもないけれども、西洋文字と雖も、又決して絶對的完全なるものとは云はれず、洋字に一長あると同時に、漢學にも一長がある、且つ將來は國字改良の問題にあらざりて、世界の文字を一變する必要が起るであらう、其時には西洋の音を本とする文字と、支那の形を主とする文字と相較し、兩方の長所を結び付て、最上完全の文字を作り、之を万国共通の文字と定めたいと思ひます、其日はマサカ五十年や

百年の間に來る筈はない故に余は國字の改良は日本が東洋を一統したる後に延しても決して遅くないと申すのであります今日我邦は種々の言語文字が入り交りて非常の混雜を起すの不便あるも其代りに世界の文字を研究して其改良を案出するには却て便利でありませう其れは兎もあれ余は斷言して國字改良は今日の急務でないと申します社會の潮流も一時の後には必ず余が意見に向て進むであらうと信します

漢字万歳 漢學万歳

漢字漢學万々歳

明治卅三年四月五日印刷
明治卅三年四月八日發行

定價拾貳錢

新瀉縣平民

井上圓了

著作者兼
發行

東京市小石川區原町十八番地

佐久間衡治

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所

株式會社 秀英舎工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所

哲學館

東京市小石川區原町十七番地

大賣捌

(本郷)田中書店
(本郷)哲學書院

(駿台)光融館
(芝)森江

(本郷)文學書房
(日本橋)嵩山房

上工79-25

廣告

● 井上圓了博士著 忠孝活論

定價十五錢 郵稅貳錢

● 同上 記臆術講義

定價十二錢 郵稅貳錢

● 同上 妖怪百談

定價廿五錢 郵稅貳錢

● 同上 破唯物論

定價三十錢 郵稅六錢

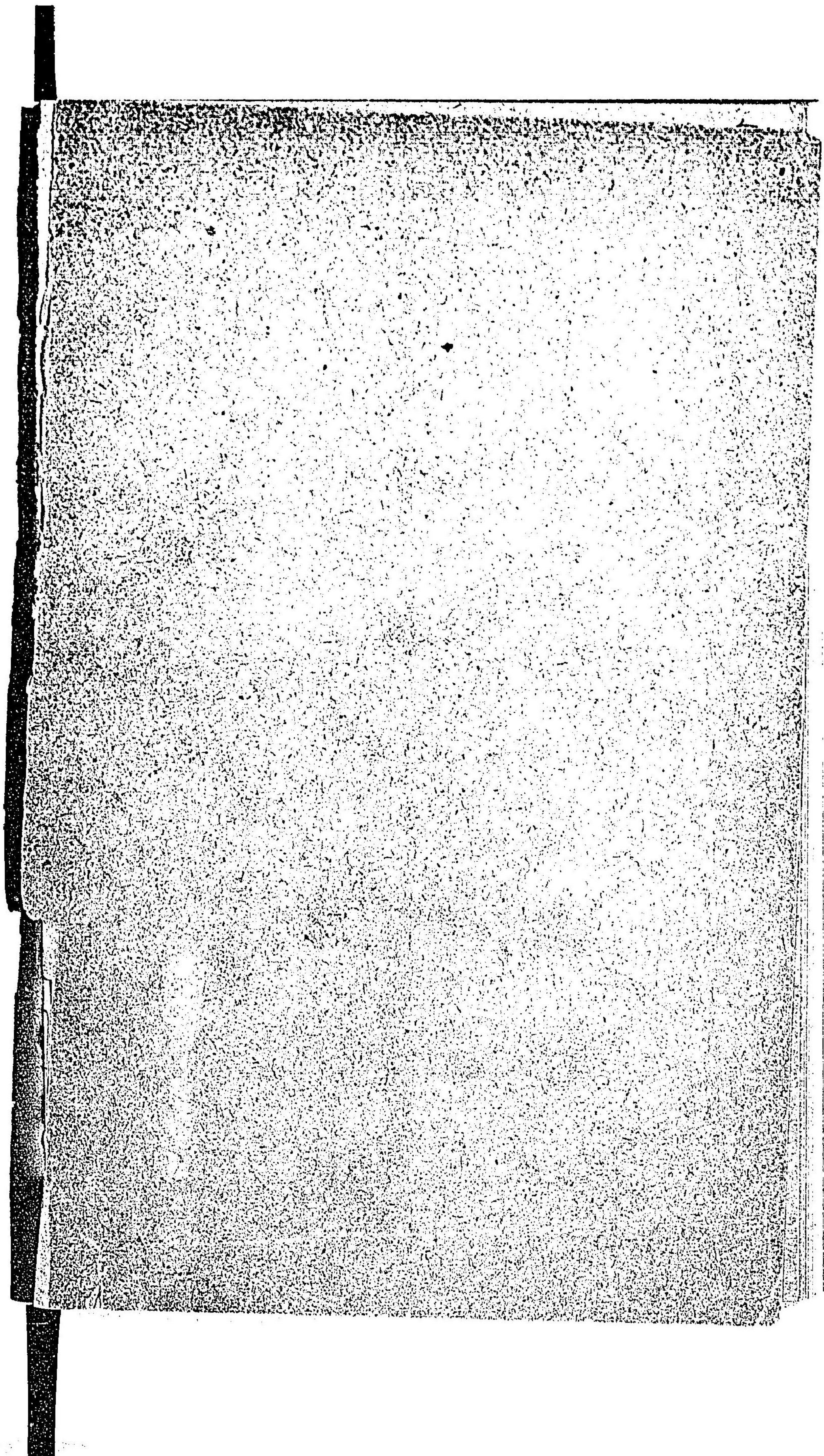
● 同上 日本倫理學案

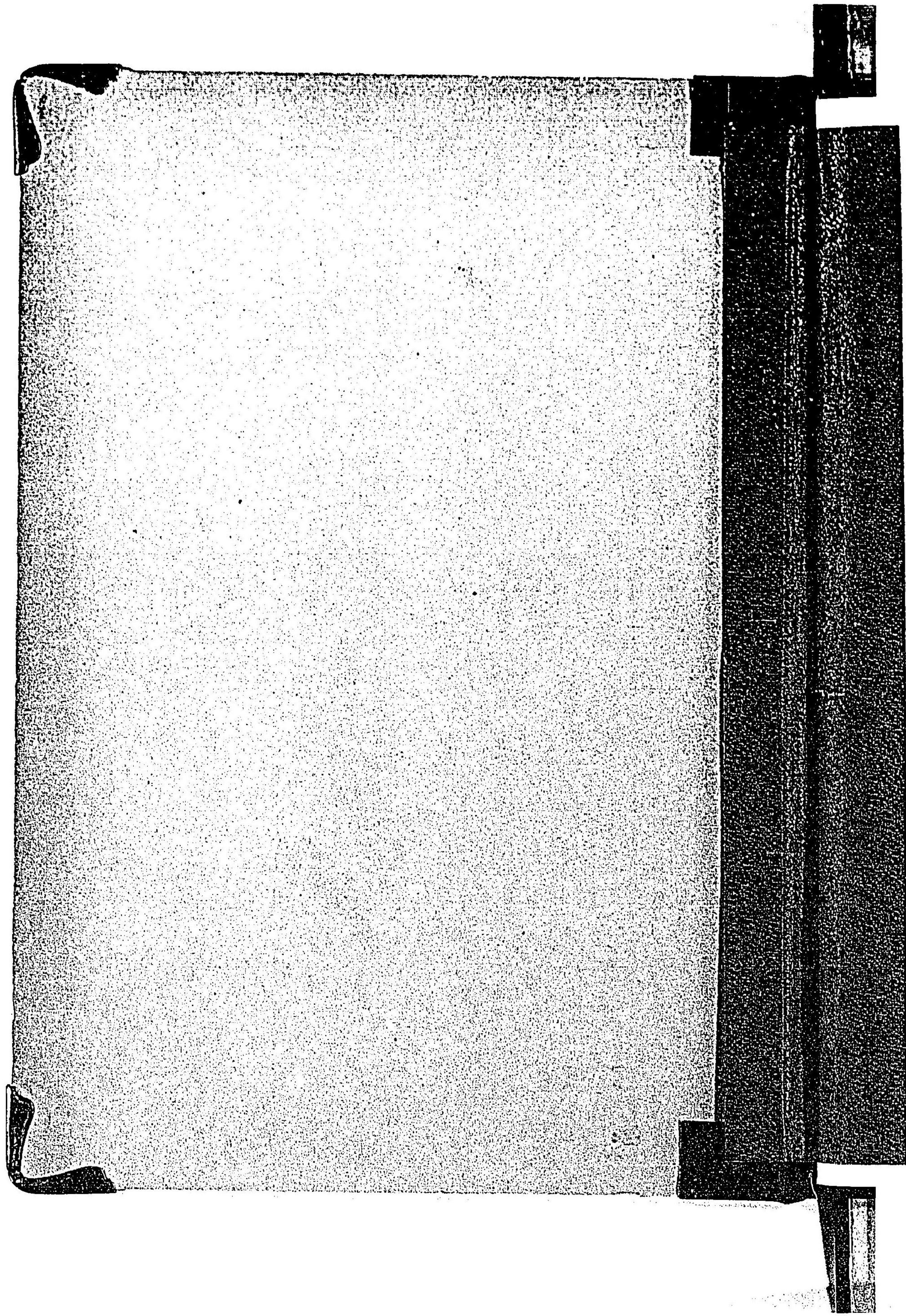
定價三十錢 郵稅四錢

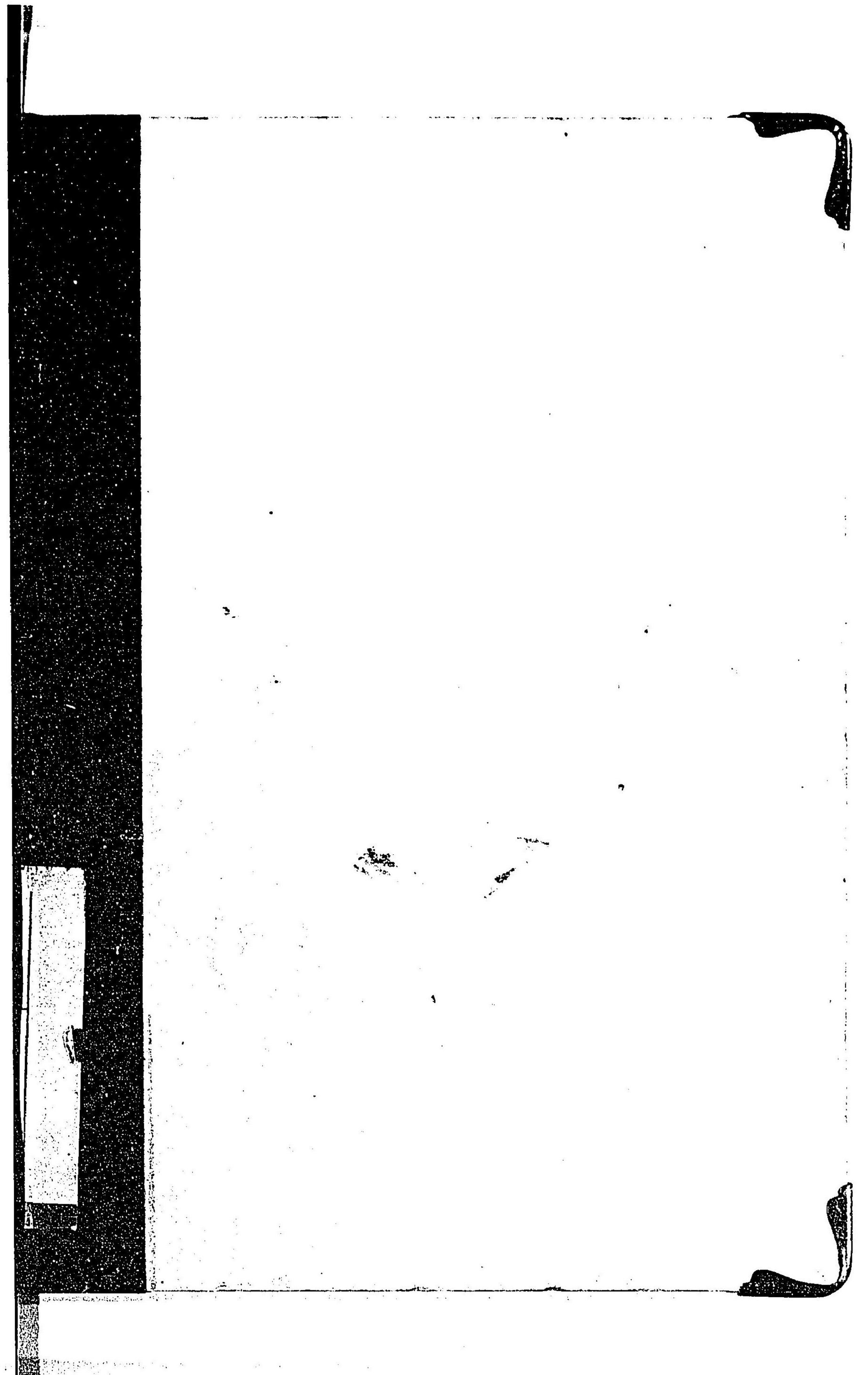
東京市小石川原町哲學館構内

以上發行所

四 聖 堂







811.2

I.421k

漢字不可廢論

国立国会図書館

076852-000-9

811.2-I421k

漢字不可廢論 一名、国字改良論駁撃

井上 円了/著

M33.4

DAC-0009



